

東北における「三反」運動と民衆

隋 藝

はじめに

本稿は、中国東北を対象地域とし、1950年代の「三反」運動を考察することによって、中国共産党（以下、「中共」と略す）による民衆統合のプロセス、および大衆運動下での基層社会と民衆の実態を解明するものである。

中華人民共和国建国初期、中共は汚職、浪費、官僚主義に反対する「三反」運動を実施し、これを大衆運動にまで拡大させた。1950年代初頭、政権を獲得したばかりの中共は、朝鮮戦争に介入しながら国内においても支配を確立し、新たな秩序を構築しようとしていた。それゆえ「三反」運動は中共の支配確立のために重要な役割を果たした大衆運動の一つであったといえる。

近年、習近平政権が推進している反腐敗運動は、過去の「三反」運動に対する中国の学者の関心を喚起している。しかし、その研究成果のほとんどは中共の公式見解に沿うものであり⁽¹⁾、「三反」運動に対する批判的な視点を欠くものである。その大半は、現在の共産党員が「三反」運動の教訓をくみとるべきであると結論付けたり、反腐敗運動の意義を強調したりする内容に止まっている。その他、特定の地域に着目して「三反」運動を論じる研究もあるが、上海に関する研究に偏っているように推察される⁽²⁾。これらの研究は運動のプロセスを詳細に整理したうえで、摘発人数のノルマの問題やそれによって発生した暴力の問題を指摘している。一方、上海以外の地域についての研究では、史料の制約もあり、運動下の社会や民衆の実態を解明する実証研究は極めて少ない⁽³⁾。

他方、日本では史料の制約があり、「三反」運動に関する研究はいまだ十分に発展しているとはいえないが、貴重な実証研究が徐々に

蓄積されつつあることは疑いない。例えば、泉谷陽子の研究は、「三反」運動を人民共和国建国初期の一連の大衆運動の中で捉え、経済体制に最も大きな影響を与えた運動と評価した⁽⁴⁾。また、金野純は上海市檔案館所蔵の公文書を利用して、実証的に「三反」運動の過程とそれが基層幹部の生活に与えた影響を論じた。金野の研究は、政治動員の過程に着目して、職場の人間関係の変化や共産党の権力の浸透を分析したことに特色がある⁽⁵⁾。

本稿では、とりわけ金野が提示した民衆の生活に注目する視点を継承し、さらに発展させることを目指したい。より具体的には、「三反」運動に対する民衆の適応に着目し、その実態を解明することを重視する。そのために、公刊資料に加え、内部資料である『内部参考』⁽⁶⁾や地域の特性を報道に含む『東北日報』⁽⁷⁾などを主に用いる。さらに、個人レベルの民衆の実態を明らかにするために個人檔案⁽⁸⁾を利用する。これらの資料に依拠することによって、社会や民衆に寄り添いながら、朝鮮戦争下に中国の東北、特に遼寧省で推進された「三反」運動を考察する⁽⁹⁾。そして、(1) 基層社会で運動が展開されたプロセス、(2) 運動によって中共が民衆を支配した実態、(3) 民衆の心性⁽¹⁰⁾に注意を払いながら、運動下での民衆の行動の動機や実態を具体的に解明したい。

一 人民共和国建国初期における東北地域の特殊性

(1) 留用人員の問題

1945年に「満洲国」が崩壊してから、東北は中国国民党と中共が相争う地域となり、1948年11月に中共に占領された。最後に占領した瀋陽について、中共は「かつて国民党が東北を統治した軍事・政治・経済の中心であり」、「多くの敵偽（敵は主に日本軍を指している。偽は満洲国国軍を指している）の残存分子がここに集まった」⁽¹¹⁾と、社会を構成する人々の複雑さを指摘した。この複雑さにもかかわらず、中共軍事管制委員会は11月3日に、「系統に従い、上級から下級へ、従前のおおり、接収してから管理する」との方針をもって、わずか4000人の幹部を派遣しただけで、15万の人口を擁する瀋陽市を接収

した⁽¹²⁾。つまり、工業の破壊や社会の混乱を避けるために穏やかな接收方針を選択したのである。旧政権の根拠地という地域性、穏やかな接收方針、自らの幹部不足などの現実に制約され、瀋陽市の接收に際して中共は大量の旧職員を留用させることになった。例えば、瀋陽市の警察官5500人のうち、4500人は留用された旧警察官であった⁽¹³⁾。

「三反」運動は主に、党・政府・公的機関・軍隊内部に発生した「三害」（汚職、浪費、官僚主義）に反対する運動であった。1951年12月1日、中共は全国で「三反」運動を実施することを呼び掛けた。その文書「中共中央の精兵簡政（財政の困難を改善するために、人員を減らし機構を簡素化するという手段）、増産節約、反貪汚、反浪費、反官僚主義に関する決定」（以下「決定」）では、中共の幹部には「都市を管理する際に、経験が不足していたため、警戒心に欠けていた。しかも、反動統治の残りかす、および資産階級の腐敗の影響が猛烈に我々を侵食している。その結果、我々の多くの幹部が国家財産を汚職・窃盗・浪費する現象が深刻になってきている」⁽¹⁴⁾との表現が用いられた。つまり、「三害」が発生した原因は複雑であるが、旧体制から受け継いだ人員（留用人員）がその主要な要因になっているのが、中共の公式見解であった。これは学界においても依然として共通認識となっているようである。しかし、後述するとおり、「三反」運動は単に「三害」に反対する運動に止まらず、留用人員の肅清でも重要な役割を果たすことになる。つまり、遼寧省では「三反」運動の背景として、党・政府機関内部に膨大な旧人員（留用人員）が存在したことが重要なのである。

(2) 接收後早期に現れた汚職問題について

接收後の瀋陽では、いまだ中共の影響力が弱く、政府機関内に旧人員が多く存在した。それにもかかわらず、地元経済の回復と関内（山海関以南）の内戦を支援するために、中共は、階級闘争や激烈な大衆運動の実施を回避した。中共は東北を占領後、「満洲国」の工業「遺産」に基づいて、経済を回復させることを最優先する政策を採択

した⁽¹⁵⁾。それゆえ、東北の政権や社会には旧政権に関与した人員などが多く内包されているという問題を黙認したまま、経済での生産が優先された。その結果、経済分野で様々な問題が発生することは免れなかったのである。

1949年2月には以下のような報告があった。ほとんどの合作社は「投機的な取引や違法行為をしている」、「トウモロコシ粉に水を混ぜて、分量をごまかしている。あるいは、役畜を販売する際に脱税や国税の申告漏れを行っている」⁽¹⁶⁾。また、ある地域の倉庫で汚職問題が発生した後、「悪質な偽政権の職員、警察、地主、旧商人や政治的に問題のある人物が自身の過去を隠して倉庫（の職員）に紛れ込んだ」と報道されていた⁽¹⁷⁾。さらに、長春市公安局第三分局北大街分駐所所長董群の腐敗の事例を教訓として、公安幹部の全体に教育が施された⁽¹⁸⁾。嫩江県工商局幹部の事例では、汚職で告発された金・姜の二人が、人民法院（裁判所）に移送された一方で、告発者が表彰を受けた⁽¹⁹⁾。宝清県長孫英は汚職・腐敗のため免職された⁽²⁰⁾。

以上は、汚職腐敗の現象が東北「解放」の直後に発生した事例であり、中共もその深刻さに気づき始めていたことを示している。全国の状況に照らして見れば、「三反」運動は増産節約運動⁽²¹⁾から発展したと言われるが、東北の場合には、増産節約運動以前から汚職が警戒されていたと見なせるだろう。また、公職者が汚職や腐敗を犯した原因の大半は、留用人員の「成分不純（中共が望まない出身階級や政治経歴）」や旧社会の悪慣習やブルジョアジーの思想の影響であると説明されていた。中共は留用人員やブルジョアジーに対する不信をあらわにしていたのである。ただし、注意すべきは、容疑者への処罰は、この段階では大衆運動による批判ではなく、行政処分や人民法院の判断に依拠していたことである。

(3) 朝鮮戦争への介入と当該時期における東北の経済構造

中共中央と東北局の汚職問題に対する警戒は一過性のもものではなかった。1950年の『内部参考』は、度々政府機関内の汚職問題を取り上げ、幹部の注意を喚起した。例えば、1950年5月22日の『内部

参考』には、次のような報道があった。1949年に東北の税務職員7900余名のうち、266人が汚職に関与したという。そのほとんどは「商人の脱税を庇ったり、商人と結託して国家の経済機密を漏洩したり、公金を貸し出したりする」などの不正行為であった⁽²²⁾。ハルビンにおいては、「去年の汚職金額は12億元⁽²³⁾に達した」という。「ハルビン人民法院の資料によると、汚職者は主に仕入れ係、事務職員、税務関係者であり、その中でも留用人員と新人が多かった」とされる⁽²⁴⁾。

朝鮮戦争勃発以前の時期に『内部参考』が東北での汚職を取り上げたということは、中共中央がこの種の問題を重視していたことを示している。これにもかかわらず、その後1950年6月から1951年7月まで、プロパガンダの場としての『東北日報』にせよ、幹部向けの内部資料である『内部参考』にせよ、東北の汚職問題に関する記事は、その紙面からほとんど姿を消していた。その背景には朝鮮戦争の勃発と戦争への中国の介入があった、と筆者は考える。

1950年6月に朝鮮戦争が勃発すると、中共は持てる力をそちらに傾注することを余儀なくされた。とりわけ、東北は地理的に朝鮮半島と隣接していたため、朝鮮戦争から受けた影響が比較的大きかった⁽²⁵⁾。東北そして全国においても、「和平保衛」署名運動とアメリカに抗議する大衆運動が推進された。その後、抗米援朝運動が本格的に展開されたが、物資、担架隊及び荷馬車の供給など、中国人民義勇軍に関わるほぼ全ての補給物資の調達が東北の負担とされた⁽²⁶⁾。その中で、注目したいのは朝鮮戦争勃発以前の財政・経済の問題である。

表1は1949年の全国の糧食での財政収支状況の概算である。中共が全国を支配下においた段階での財政は総じて非常に厳しい状況にあったといえる。その中で、東北はいち早く生産が回復軌道に乗っていたため、財政状況は比較的楽観的であった。一方で、元来経済が発達していた華東地区の経済ははまだ回復していなかった。また、表1の元になる徴税が行われた1949年夏から秋の段階では、中南地区は完全には中共の支配下に入っておらず（「剿匪」の段階）、西北と西南地区もまだ「解放」されていなかった。その後、1950年6月ま

表1 1949年全国の糧食での財政収支（単位：億斤）

地区	収入	支出	赤字	支出に占める赤字の割合（％）
東北	172	182	10	5.5
華東	71	192	121	62.9
華北	28	78	50	64.7
中南	22	77	55	71.2
西北	8	31	23	74.1
西南	2	7	5	71.4
合計	303	567	264	46.4

※この統計は概算である。1斤は500グラムである。なお、1949年秋までの段階で中共はまだ中南、西北、西南地区を完全に支配できておらず、これらの地区からの税収は少なかったと思われる。

出典：中国社会科学院・中央檔案館編『1949-1952 中華人民共和国經濟檔案資料選編 総合巻』中国城市經濟社会出版社、1990年、119-120頁。

で、中共は、チベット地区を除いて、中国大陸全土をその支配下に置いた。結果、1950年の国家総財政収入（糧食と現金を含む統計）に占める各行政区の割合は中央（24.04%）、東北区（23.79%）、中央直轄省市（8.27%）、華東区（19.23%）、中南区（13.08%）、西南区（8.08%）、西北区（2.45%）、内モンゴル区（1.06%）であった⁽²⁷⁾。この統計は朝鮮戦争が勃発してから半年以降の数字であるが、依然として、東北が国家の財政収入に多大な貢献を果たしていたことは間違いない。それゆえ、抗美援朝のための費用の調達は多く東北に頼ることになった⁽²⁸⁾。そして、東北では戦争での物資需要を満たすために、生産を維持し拡大することが最も重要な課題となった。

周知のように、東北は人民共和国建国初期において最も重要な工業地域であった。その構造的特徴は、国営・公営工業（重工業と軽工業を含む）が全体の87.5%を占め、私営工業はわずか12.5%であった⁽²⁹⁾。当時の全国の平均水準は、国営・公営（合弁を含む）が36.7%、私営は63.3%であった⁽³⁰⁾。ここから、東北では国営・公営工業の比率が高かったことがわかる。また、東北の国営・公営工業では重工業が7割弱を占め、軽工業は2割強であった⁽³¹⁾。一方で、東北の私営工業のほとんどは手工業生産を中心とする軽工業の中小企業であった。商業の場合には、1949年の統計によれば、国営（合作社を含む）は3割弱、私営は6割以上であった⁽³²⁾。要するに、1950年まで、東

北の国営・公営企業は重工業を中心とし、軽工業および商業は主に民間企業が掌握していたことになる。

ところで、戦争を継続するためには重工業だけでなく、軽工業と商業（流通）も重要である。とりわけ、食品・被服・医薬品等の軽工業製品の生産には私営企業の積極的な協力が不可欠であった。また商品の流通や地方間の需給の調節にも、私営商業の発展と協力が重要であった⁽³³⁾。

実は、東北が中共の統治下に置かれてから、国営経済が私営経済を指導する方式での経済回復が目指されており、そのため「加工制」、「注文制」、「代理販売」といった形式での経済活動が促進されていた⁽³⁴⁾。商業の場合には、公私合弁制などが推進された⁽³⁵⁾。つまり、朝鮮戦争以前の時期に、国営経済がどの程度主導的な位置を占めたのかについては別途詳細な検討が必要であるにせよ、原材料、資金、市場などの各側面において、国営企業と私営企業は連携を深めつつあったといえる。

朝鮮戦争での巨大な需要は東北の経済を刺激し、東北銀行は1950年7月から企業に対する融資を拡大し、生産を後押しした⁽³⁶⁾。その中で私営商工業に対しては、1,000億円の融資拡大が決定された⁽³⁷⁾。私営工業の生産力は、1949年を基準とすれば、1951年には1.4倍強に成長した⁽³⁸⁾。投資と生産が拡大し、国営・公営経済と私営経済との連携はさらに緊密になりつつあった。このような状況の下では、必然的に政府機関内の人員や中共の幹部（とりわけ経済関係者）が私営企業とのかかわりを持つようになることは免れようがなかった。このため、この時期に反汚職・反腐敗運動を開始すると、政府機関内の人員や中共の幹部が私営企業と関係を持つことを委縮させる恐れがあった。そうなれば、政府と民間との協力関係に影響が及び、生産に悪影響を与えることが予想された。

朝鮮戦争という背景の下で、陳雲が言うように「戦争が第一」⁽³⁹⁾であり、東北は全力で生産に邁進し、戦争を支援することを求められた。この戦争を支援することを最優先とする状況の下で、汚職・腐敗に反対する動きはほぼ停止していった。また、戦争による需要

は東北の経済に戦争景気をもたらした。私営商工業が大きく発展して、私営商工業と公営商工業・公的経済機関との関係はますます緊密になっていった。

二 東北における「三反」運動の展開

(1) 瀋陽市における反汚職・反腐败運動から

東北の「二反」運動へ

およそ1年間停止された汚職・腐敗に反対する動きは、1951年7月から以前より大きな規模で再開されることになった。その背景には、やはり朝鮮戦争の影響があった。1951年5月から、朝鮮戦争は膠着状態に陥っており、中共中央は持久戦の準備をする一方で、和平交渉を模索する方針を確立していた⁽⁴⁰⁾。そして、戦争が膠着するなかで、中共には国内社会へ注意を向ける余裕も生じた。その結果、持久戦を支援するためにも、愛国公約運動⁽⁴¹⁾や各種の献納運動が推進されることとなった⁽⁴²⁾。その一方で、停戦の情報が広がると、瀋陽市において和平交渉をすれば愛国公約をやめてもよい、献納しなくてもよい、といった反応が表面化した⁽⁴³⁾。社会の緊張感が弛緩しつつある状況に対して、中共は警戒感を強めていった。そして1951年7月の『人民日報』や『東北日報』において、緊張感を維持するように繰り返し社会に呼び掛けた。「全ての抗米援朝工作は停戦が真に実現するまで、これまで通り、いささかも怠慢にならないように」⁽⁴⁴⁾、「停戦交渉をしても、決して気を緩めてはいけない」と民衆に注意を喚起していた⁽⁴⁵⁾。さらに、『東北日報』では、「朝鮮問題を平和裡に解決したければ、必ず終始変わらぬ闘争を行い、警戒心を持ちつづけなければならない」との声明を出した⁽⁴⁶⁾。これらの記事からは、中共の国内社会を一層引き締めようとする意図が見て取れる。このような国内・国際の情勢の変化を受けて、瀋陽市における汚職腐敗に対する取り締まりが再開された。

1951年7月の『東北日報』では、再び汚職腐敗事件の報道が顕著になった⁽⁴⁷⁾。1951年7月21日に瀋陽市委員会は2,000人の科長以上の党員と非党員の会議を召集した。会議において市長は、会議参加者

に対して政府機関内での反汚職・反腐敗運動を展開するよう指示を与えた。運動は、「主に自主的な自白によるが、告発と摘発とを合わせて」進められた。同時に「汚職腐敗現象に対する大衆の監督と告発に依拠する」ことにも言及された⁽⁴⁸⁾。しかし、当該時期の『東北日報』を確認する限り、民衆はこれに巻き込まれておらず、まだ政府機関内部の運動に止まっていたようである。また、批判の対象には、汚職以外に、男女関係などの生活態度の問題も含まれていた。例えば、「元市文聯の伝統演劇創造部部長の史Cは、1944年に革命に参加して、1947年に黨員になった」が、「生活が墮落しており、職権を利用して、2人の女優を強姦した」⁽⁴⁹⁾とされた。当初は、幹部に問題が発覚すると人民法院の裁判を経て処罰が決定されるのが基本であった。しかし、この運動は8月に入ると強化され、自白と告発が奨励される段階に入った⁽⁵⁰⁾。

運動の中で現れた問題点は、新聞記事からも散見される。労働者による一般的な反応としては、「告発しても、処理してもらえない」、「私が彼を摘発したら、後に面倒なことを招く」、「我々が自白するばかりでなく、幹部にも自白してもらうべきだろう」などがあった⁽⁵¹⁾。ここから、運動に対する組織的な指導がないこと、政府機関の範囲内に限定した運動であったことが見て取れる。そのため、身近な人間関係を考慮して、告発はなかなか拡大しなかった。また、幹部の中で、中上層幹部と大きな汚職問題を持つ人員は「傍観する姿勢をとったり、決して自白しなかったりして、ごまかしてこの時期をやり過ごそうとしていた」という⁽⁵²⁾。

瀋陽市の反汚職・反腐敗運動は8月25日に完了した。運動においては、2万人以上が反汚職・反腐敗の教育を受けたという⁽⁵³⁾。運動展開の手順として、8月6日までにすべての単位のすべての人員に対して教育が施された。8月10日前後には、工商局、工商局に属する各専業会社、公安局、公用処（水道、電気などのサービスを提供する機関）に属する各工場、不動産会社、市政府行政処、運搬会社の7つの重点単位で自白と摘発運動が行われ、1万人以上が運動の洗礼を浴びた。汚職・腐敗事件の90%が自白によって発覚したが、高級

幹部が関係した重大な案件はすべて告発によって発覚したものだ。さらに、後述する内容との関わりから注意すべきは、この段階での汚職や腐敗の発生原因については、主に官僚主義、政治的自覚の低さ、人員採用時における審査の不備、制度の弛緩などが挙げられていることである⁽⁵⁴⁾。以上のプロセスを経て瀋陽市における反汚職・反腐敗運動は一段落することになった。

しかし、その直後の1951年8月31日、高崗（中共中央東北局書記）は東北一級幹部会議で「汚職や墮落に反対し、官僚主義に反対する」（二反）と報告した⁽⁵⁵⁾。この報告を契機に、東北全体に拡大する形で二反運動が開始された。9月7日の『東北日報』の「社論」では、他の地方に先駆けて反汚職・反腐敗運動に取り組んだ瀋陽市の事例を典型として取り上げ、運動は大衆運動の形で進めなければならないと注文をつけた⁽⁵⁶⁾。この『東北日報』の記事から、高崗による報告の後に、東北各地で二反運動が展開されたことが確認できる。また、反汚職・反腐敗運動がすでに完了していた瀋陽市では、官僚主義に反対することが運動の目的に加えられた⁽⁵⁷⁾。

(2) 増産節約運動

では、東北の二反運動はいかにして「三反」運動へと発展したのだろうか。これを解明するには、まず増産節約運動を検討しておく必要があるだろう。増産節約運動も東北から始まり、その後全国に広がっていった運動である。

東北における増産節約運動には、主に二つの背景があると考えられる。第一には、本稿の一の(3)「朝鮮戦争への介入と当該時期における東北の経済構造」で検討したように、東北が朝鮮戦争を支援する重要基地となり、抗美援朝運動での物資の供給と運輸の任務が課されたことである。第二には、国共内戦と朝鮮戦争を支援するため、生産競争が一貫して行われたが、量が追求された一方で、質が保障できず、原材料の浪費が深刻になったことである⁽⁵⁸⁾。

朝鮮戦争が長期化するなかで、1951年5月18日から6月2日にかけて、東北局は瀋陽市で都市工作会議を開催した。東北工業生産に

おける当面の重大任務として、増産節約の目標が掲げられた。具体的には、工業生産において、年間500万トンの食糧に相当する富を節約することである。この富を創出する方法は、流動資金の回転を加速したり、生産コストを下げたり、設備と生産方法の改良による品質向上に努めることに求められた⁽⁵⁹⁾。このような具体的な増産節約の手段に鑑みれば、増産節約運動は一般民衆を巻き込む政治運動というより、経済の側面に重点をおいた生産動員であったことが確認できる。8月の『東北日報』だけでも、各企業の増産節約に関する記事が20件以上報道されていた。すなわち、二反運動と増産節約運動は、ともに早い時期から東北で開始され、同時進行的に推進されてきたのである。

(3) 二反から「三反」へ

1951年10月26日、東北局幹部大会で高崗は、「広範に増産節約運動を呼びかけ、さらに汚職、浪費、官僚主義に対する闘争を深化させる」と報告した⁽⁶⁰⁾。そして、二反運動に「浪費に反対する」ことを加えて、増産節約運動と関連させて、「三反」運動へと転換させた。その背景には、財政上の困難と朝鮮戦争への持続的な支援という目的があった⁽⁶¹⁾。毛沢東は、10月23日の政治協商会議一期三次全体会議の開会の挨拶において、「生産の増加、節約の励行をもって、志願軍を支援する」ことを強調した⁽⁶²⁾。東北局はこうした中央の意向を受けて、初めて二反から「三反」へと方針を転換したと考えられる⁽⁶³⁾。

11月1日、高崗は東北の「三反」運動に関する報告を中央に送り、さらに、毛沢東も東北の事例を全国へ転送して、「全国規模の増産節約運動の中で、断固として、汚職、浪費、官僚主義に反対する闘争を行う」ことを要求した⁽⁶⁴⁾。そして、12月1日、中共中央は正式に「三反」運動に関する「決定」を出した。「三反」運動の特徴は以下の史料から窺える。

1952年の財政収入は1951年より増加することが見込まれる。全国の大衆が行う偉大な増産、節約と汚職、浪費、官僚主義に反

対する運動により、収入が相当に増加することが間違いなく見込まれる。(中略)党の新聞と宣伝員や報告員は積極的に闘争に参加すべきであり、労働組合(工会)、青年団、婦女連合会は自身の任務の中に、摘発および汚職、浪費を監視する項目を加えるべきであり、各自が積極分子を派遣して節約検査委員会を組織すべきであり、機関、企業、学校、部隊、農村、および都市の街道においても組織的にこの運動を立ち上げるべきである⁽⁶⁵⁾。

上記の史料が示しているように、それまでの東北における二反や「三反」と異なり、12月1日の「決定」の中では、明確に「節約検査委員会」を組織して、政府機関や工場の範囲を超えて、学校・部隊・農村・都市の街道においても、運動を展開することが要求された。東北はこの要求に応え、節約検査委員会を組織して、12月27日に初めての同委員会会議を開催した⁽⁶⁶⁾。1952年1月に、中共中央は「直ちに期限を切って大衆を立ち上げらせ、『三反』闘争を展開させる指示」を出して、「三反」運動のさらなる拡大を促した⁽⁶⁷⁾。

以上より、増産節約と「三反」運動を結合させて組織を指導することが要求されたこと、またこの運動が国家の財政収入を増やす主要な手段と見なされていたことがわかる。これまで政府機関内に限定されていた運動を全社会に拡大し、その結果、学校に所属する人々や農民や都市の一般民衆までもが運動に巻き込まれていった。つまり、生産動員と政府機関内の二反運動とが一体化して、広範な大衆運動へと転化していったのである。

(4) 「打虎」とノルマ化

このように「三反」運動は大衆運動として拡大することが求められた。しかし、この運動には、展開が容易ではないという問題が広く存在したようである。一部の政府機関では、運動の展開が不十分、あるいは中途半端、さらには展開が極めて困難であったと指摘されている⁽⁶⁸⁾。その根本的な原因は、幹部の思想問題にあったという⁽⁶⁹⁾。例えば、本溪市政府財務科科長が人民幣500万余元を横領したことが発覚したが、市長が処理せず、その科長を引き続き瀋陽の工業会議

へ派遣していた。科長が会議を終えて本溪に戻ってから、ようやく
案件が人民法院に送られたという。その結果、本溪市市長は退職処
分とされた⁽⁷⁰⁾。

以上のように運動に対して幹部の積極性が低かったこともあり、
毛沢東は「三反」運動を推進するために、汚職・腐敗者のノルマを
設定することにより、運動をエスカレートさせた⁽⁷¹⁾。これを「打
虎」⁽⁷²⁾の段階と呼ぶ。1952年1月26日、高崗は全東北において「大
虎」500匹を捕まえる計画を毛沢東に報告した。毛沢東は以下のよう
に評価した。

東北全域の各党政軍機関及び企業の職員において、大虎が500匹
を超えている可能性がある。この数字より2倍あるいは何倍も
多いかもしれない。ただし、ひとまず500匹と設定するのは正しい
ことであり、運動が深化するにつれて、状況によって「打虎」
のノルマを追加すればよい⁽⁷³⁾。

毛沢東は東北の「打虎」計画を評価したが、500という数字に満足
していないことが窺える。そして、東北局は2月2日にノルマを
2,000匹へ引き上げた。毛沢東は東北の事例をもって、全国の各行政
単位に対して「打虎」計画を中央へ報告するように促した⁽⁷⁴⁾。とこ
ろが、東北局がノルマを2,000匹に引き上げたことに対しても、毛沢
東は依然として満足しなかったようである。

東北局の2月2日の電報によれば、「東北地区の虎を2,000匹以
下にするのではないと予想している」という。(しかし)そこでは、
虎の大中小のレベルに言及していない。もし、すべての虎
を含めれば、この数字は低すぎる。東北には大中小の虎が2万
匹以上いるはずである⁽⁷⁵⁾。

以上の毛沢東の意見に沿って、2月6日、高崗は「大虎」4,000匹、
「中小虎」2万5,000匹を捕まえる計画を、さらに25日には瀋陽で数千
人規模の公開審判大会を開く予定であることを毛沢東及び中共中央
に報告した⁽⁷⁶⁾。毛沢東はこの計画に非常に満足したようである。

全国6つの大区において（東北は）トップである。各大区は東
北と比べものにならないが、各自の状況に基づいて次第にノル

マを引き上げて、幹部の中での右寄りの思想を批判すべきである⁽⁷⁷⁾。

以上に述べたように、この段階において、東北は運動の典型として毛沢東に評価され、各行政大区や政府機関へ東北の事例が押し広められた。また、「打虎」計画について、毛沢東は自らの予測に基づいて、各行政機関や企業に指令を出していたようである。そして、楊奎松が指摘したように、各地は競争するかのよう「打虎」のノルマをどんどん引き上げていった⁽⁷⁸⁾。

三 「三反」運動における問題

(1) 暴力問題

水増ししたノルマを実現するために、冤罪や汚職、浪費、官僚主義を犯したとする強引な告発が多発した。ここでは、撫順市の「三反」運動における残虐な体罰と拷問に関する報告を紹介する。

撫順の炭硯管理局に属する勝利鉦だけでも、三反運動で行われた体罰は30種類以上であった。その中で最も残虐なのは以下である。①生き埋め：綿入れて頭を巻いて、手を縛ってから、下半身から少しずつ頭に至るまで土で埋める。埋められた人が必死にもがいているとき、頭と胸あたりの土を掘り返して、汚職を認めさせる。もし認めなければ、再び埋める。勝利鉦に28年間在職した楊YPは汚職を疑われたため、2回も生き埋めにされた。現在の調査結果によれば楊の汚職は事実無根であった。②釘歩き：受刑者に靴と靴下を脱がせて、素足で釘の上を歩かせる。③乗馬のようにしゃがむ：机の上で、靴と靴下を脱がせ、体重をつま先に乗せて、しゃがませる。長時間乗馬の姿勢を保持させる。かかとを机に接近させないように、足の下に画鋲を置く。(中略)⑩電線の中の針金を指にさす。(中略)もし体罰を使っても、罪を認めない場合には、汚職疑惑のある人の家族を殴る。妊娠中の家族も免れず、そのために流産した家族もいた。労働者の馬WCが体罰を受けた時、彼の息子はあまりの恐怖に精神障害を起こした⁽⁷⁹⁾。

以上より、「三反」運動は基層社会で相当の混乱を生んだことがわかる。多種多様な残酷な体罰によって、「汚職の事実」の自白を迫られたため、冤罪が生み出されたことは容易に想像できる。もちろん、運動中の暴力は上記の撫順の工場だけではなく、当時の一般的な社会現象であったと考えられる。『内部参考』では、瀋陽市の各工場において体罰現象が絶え間なく続いていたことが報告されている。

虎を真っ赤に焼いたコンロのそばで火に当てたりした。体罰以外に、闘争手段の簡便化も普遍的な問題となった。紙一枚をもって、虎に汚職事実を書くように迫って、「書け！書け！書け！」と打虎人員が叫んだ。虎は「何もないのに！何を書くのか」と答え続けた。また、虎の手を掴んで、手形を押させた⁽⁸⁰⁾。

上記の史料は、運動が進展するにつれ、ノルマを達成するのに体罰に依拠し自白を迫るのでは手間がかかりすぎる、あるいは効率がよくないと思われるようになり、「闘争手段の簡便化」が求められていったことを示している。つまり、人に罪を認めさせる手段が荒っぽくなったり、罪をでっちあげることすら辞さなくなったりしたのである。このようにして判定された「虎」は後に証言を覆すことが多く、東北の「虎」の数は1952年10月の安子文の報告によれば、およそ31%減少したという⁽⁸¹⁾。証拠不足、不当な量刑、冤罪などの問題が多く存在したであろうことが推察できる。

その一方で、厳しい政治環境に対応するために、社会にはいくつかの傾向が現れた。まず、政府機関の幹部においては、体罰や闘争に巻き込まれる恐怖から早急に逃れるために「具体的な汚職の事実を言わずに、自らに（犯罪者や落伍者の）レッテルのみを貼り、積極的に（自白したふりをして）だます」⁽⁸²⁾ことが絶えず発生した。一方で、「打虎」現場の緊張感は、加害者と被害者以外の広範な末端職員や労働者にも波及していった。これらの人々は「三反」運動から間接的に影響を受けて、「ラシャのコートをしまっておいて、わざと粗衣を作って着る。買った新しい革靴をしまっておいて、新たに布靴を買って履くなど」、党の方針を忖度した自己防衛的な行動をとるようになった⁽⁸³⁾。

つまり、闘争に巻き込まれる恐れのある者は運動から逃れるために、わざと積極性を示して、闘争に巻き込まれる前に自らを批判する術を選択した。また、一般職員や労働者はコートや革靴など贅沢と思われるものを隠して、粗衣や布靴などを身に付け、節約の励行をよそおった。運動中の民衆は、ゆとりのある生活を求める内面を隠しながら、運動には積極性をよそおい、かつ質素な日常生活の表象を作ることに腐心していたのである。

(2) 無秩序状態

「三反」運動のさらに大きな問題は、政府機関内の秩序を乱したことである。運動は幹部、公務職員の汚職を摘発することが主要な目的であったが、その中で積極分子の発見と抜擢も重要視された⁽⁸⁴⁾。とりわけ旧幹部の打倒と新幹部の登用は、一般民衆とくに野心のある人々に立身の機会を提供した。最終的に、運動の行き過ぎが生じて、日常業務や生産に影響を与えることになるのは必然だった。以下の史料は旅大市で発生した混乱である。

党組織が運動の指導を放棄したため、無政府状態になり、三反運動に大きな偏りが発生してしまった。大衆は三反運動の意義は幹部を懲らしめること、共産党を懲らしめることにあると理解していた。(中略)ある大衆は「共産党の中は真っ暗闇」、「必ずこれらの古参党員にその地位を失わせる」、「大衆でいることは党员となるより光栄である」と誤認している。ある個別機関では、悪質分子がこの機に乗じ蠢動した。例えば、大連工業専門学校では、ある人が「校長屈BCを追い出せ」と提案し、デモを準備して毛主席と電報でやり取りしようとした。また、「毛沢東以外、他の人みなに不正行為がある。旅大市委も摘発の範囲に含まれる」といった。衛生局が大会を開いたとき、蔣YD(副局長、不正問題がある)は頭を下げて、大衆の前に立った。水を飲みたいとき、大衆に向かって「水を飲んでもいいですか」と懇願した。ある人が彼を指差しながら「あなたは400キロのガソリンの賄賂を受け取った、認めるか」と聞いた。蔣は考えず

に「はい！はい！はい！」と即答した。この指差した人が「実は40キロだった、でたらめに認めたのはどういう意味だ」とさらに責めると、蔣はまた「はい！はい！はい！」と答えた⁽⁸⁵⁾。

上記の史料により、東北において、一部の地区や機関内で、末端の党組織が機能しなくなり、本来運動を指導する立場である幹部と党の末端組織が批判と闘争の対象となり、指導権を失ってしまったことや、毛沢東以外の幹部は誰でも闘争の対象と見なされたことがわかる。これは裏返せば、毛沢東のカリスマ性を意図的に利用する人さえ現れていたともみなせよう。大衆運動はしだいに制御不能になっていった側面がある。「三反」運動に対して、積極性（質素な生活ぶり、自白または他人を告発するなど）を見せなければ、いつでも闘争の対象にされる恐れがあるといった抑圧的な政治環境の中で、大多数の民衆は余儀なく運動に巻き込まれたのである。そのため、運動の現場において民衆の一部は過剰に積極性を発揮した。彼・彼女がこのような行動をとったのは、中共のイデオロギーを受容したためとは限らず、運動の過程で闘争や批判にさらされる恐怖・不安からの自己防衛の側面が大きかったと考えられる。さらに、「三反」運動が民衆に新幹部に登用される機会を提供したことも、大きな功利的動機となり得るものだった。

(3) 個人檔案から見た「三反」運動

中国では、個人檔案は人の生涯を記録する文章というだけではなく、出身階級、政治問題に関する記録が最も重要視された。本人以外に、親戚や社会関係の項目もあった。また、ほとんどの個人檔案には、個人の自叙伝や当該人物に関する歴史事実の他人による証言も含まれる。とりわけ、1950年代と1960年代の変革期の中国においては、職場の移動および政治運動の度に新たに個人檔案を作り、従来の檔案と併せて所属する単位（機関・団体あるいはそれに属する各種の部門、勤務先を広くさす）に保管された。こうした檔案の性質から、当時の中共の個人に対する支配の程度、また息苦しい政治環境が窺える。

そこで、政治経歴に問題がある曲Sの個人檔案⁽⁸⁶⁾を利用して、遼寧省の「三反」運動における、党による民衆の掌握と民衆が置かれた社会環境を検討したい。曲Sは1920年生まれ、本籍は山東省で、都市貧民の出身であった。「満洲国」時代からずっと警察官を務めてきた。瀋陽が中共に占領されたとき、そのまま留用された。「満洲国」警察官という経歴から、曲Sは運動の初めから、最も不信感を集めた留用人員であったと考えられる。表2は1952年の曲Sの「貪汚問題登録表」の一部分を翻訳したものである。

檔案には、職権を利用して利益を得る行為が多く記載される一方で、男女関係を含む私生活の態度も罪として数えられた。曲に対する処分の意見では、節約検査委員会(表2)、曲が所属した北市場交番、人民法院による処分はそれぞれ異なったものであった。1952年5月10日、北市区公安分局北市場交番の評議組の中では、曲が積極的に罪を認め、金銭を返還し、また態度がよかったため、行政上の格下げ処分意見がまとめられた⁽⁸⁷⁾。他方、汚職事件の情状が重く、自白を拒んだりして、罪減ほしの手柄を立てる態度がなかったことを重く見た人民法院は、労働改造2年、汚職で得た金銭を全額返還させるという判決を下した⁽⁸⁸⁾。その中で、北市場交番のみは、曲が「運動中の態度がよかった」と認定し、「行政上の格下げ処分」との意見を出していた。これに対して、節約検査委員会と人民法院はともに、曲の運動中の態度が悪いと判断して、それぞれ除名の行政処分と労働改造2年の判決を下した。北市場交番の評議は1952年5月10日、人民法院の判決は1952年5月22日であった。この間、中共中央あるいは東北局による「三反」運動に対する新たな指示は確認できない。

これを踏まえれば、北市場交番の寛大な処理について、以下のよう
 に説明することが可能であろう。まず、北市場交番ひいては瀋陽
 市の警察機関(曲が自分の経歴を書いた文章によれば、「解放」前、
 交番の間での転勤歴が多くみられる)は曲の生活空間であり、瀋陽
 市「解放」以前から警察官を勤めてきた曲は、そこで深い人間関係
 を築いてきたと考えられる。また、当時、汚職の容疑者にとって、
 他の汚職や

表2 「貪汚問題登録表」

三反運動において摘発された汚職材料	主要な汚職手段		職権を濫用し、麻薬の密売を庇い、芝居の入場券を転売し、盗み取るなどがある。	
	時間、場所、汚職の方法、物、金額	<p>①ゆすりとり 管轄する裕民製材廠に往來する客が長く滞在するのに、規定に従って報告しなかった。戸籍制度に違反したのに、曲Sは止めないだけでなく、許可して滞在期間を延長させた。その代わりに、ゆすりとする目的を達成した。1950年、相次いで東北幣200万円、薪300斤（150キログラム——引用者）をゆすりとした。また、当該工場の食堂で5ヶ月食事をして、食事代東北幣150万円が未払いであった。（中略）1949年から1951年まで、私営商人、特業居民、偽警察、麻薬売人、悪徳商人等、計42人から東北幣2,597万円、人民幣422万2,000元をゆすりとした。</p> <p>②投機的取引 1951年に職権を利用して梅蘭芳の芝居入場券4枚を購入して、闇市の高値で転売して、人民幣4万円を得た。</p> <p>③取賄をして不正を働く 1950年に交番が没収した麻薬2袋を盗み出して、朝鮮族の金LD（麻薬売人の頭目）に販売させ、東北幣200万円を得た。金は曲を利用してできる人物だと思って、賄賂を贈った。2回合計で東北幣300万、ボールペン1つ、銀貨8元であった。その後、金の麻薬販売に対して曲は放任していた。</p> <p>④盗み取り 1951年12月、曲は麻薬売人を捜査した時、相手の隙に乗じて注射器一つを窓の外に置いた。交番に戻って案件を報告した後、またその場所に戻り、注射器を取り出し、十八緯路（街道名）楊JY（国民党軍医官）に売り、人民幣5万円を得た。</p>		
	合計金額	人民幣 約930万元		
汚職関係者（名前、職業、住所、関係）	<p>李XX, 經理, 北市区XXX, 頻繁に交際 李XX, 悪徳商人, 北市区XXX, 頻繁に交際（偽滿奉公隊隊長） 曹XX, 經理, 北市区XXX, 頻繁に交際 金XX, 流民, 北市区XXX, 頻繁に交際</p>			
汚職の証拠	返還贓物	品名	西洋腕時計1, 大金星万年筆1, ボールペン1, 小型望遠鏡1, カメラ2, 人民幣153万元	
		総額	人民幣：264万5,000元	
本人の運動における態度	三反運動の初期において、肝心な点を避けて、わずか131万2,000元の汚職問題を自白した。また、攻守同盟を結び、互いにかばいあった。しかし、確実な証拠の前で、不正を認め、他人の4件の一般問題を摘発した。			
処理の結論	汚職の性質及び程度	一貫してゆすりとり、麻薬を盗んで売り飛ばし、麻薬売人を庇った。また国民党員と男女関係をもった。	小組意見 (節約検査委員会)	情状が重く、普段から仕事に責任を持たず、私腹を肥やし、男女関係がみだれたなどによって、警察官を除名する行政処分を下すという意見。
	処理意見	除名処分	処理機関の署名・印鑑	瀋陽市人民政府公安局北市区分局節約検査委員会

不正行為のある人を摘発することが手柄になった。これはまた運動に対する態度の評価に関わってくる。それにもかかわらず、曲と金銭のやり取りがある人は30人以上いるなかで、曲は他人の一般問題4件を摘発しただけであった。加えて、「ゆすりとり」で挙げられた内容を斟酌すれば、曲は人情に通じ、融通のきく人物とさえ考えられる。それゆえ、自身が所属する北市場交番の審議においては比較的寛大な処分意見が出されたのであろう。

さらに、汚職行為を具体的に検討してみる。1952年3月22日付の曲を摘発するシートは6件あり、また2月から4月までの間に、曲と金銭のやり取りがあった人物による自白書あるいは始末書が付されている。つまり、他人の証言である。これらの証言のほとんどは個人の間金銭の貸し借りであり、未返還の部分が汚職と見なされたことがわかる。その中では、以下で紹介する万年筆の案件が興味深い。

(わたくしは)自白者の春興文房具店の李春起です。1951年のある日、管轄交番の戸籍員(警察機関で戸籍の登録と管理を担当する警察官)曲さんが万年筆を買いに来店しました。しかし、店はずいぶん前から万年筆を置かなくなりました。以前に売り残したわけありの品から選んで、使える部品を組み合わせれば、使えるかもしれないと言いました。そして、売り残した品を出して、ペン先が使えるものの、インクタンクが壊れたものを選び取りました。誰か修理できる人に頼んで修理すればなんとか使えるだろうと言いました。いくら払えばいいかと曲に聞かれましたが、いいから、どうせ売り残した欠陥品です、と答えました。以上は深刻な誤り■■■■今後の良い関係を築くために、重大な誤りを犯しました。政府の寛大な処理を願い、真摯に受け止めます⁽⁸⁹⁾。

当時、万年筆は高額の商品であったとはいえ、売り残しの使いものにならない万年筆をただでもらうことさえ収賄と見なされた。一方で、万年筆を贈る側は自ら目的をもって賄賂を贈ったと認めさせられ、謝罪と相手の摘発を強要された。また、曲Sの自白状でも、

他人の証言でも、金銭の貸し借りの際に、曲による脅迫行為はほとんどなかったことが認められる。もちろん、その中で曲の警察官という身分を考慮すると、何の下心も無かったとは断言できないが、全てを「ゆすり」と決めつけたことは、やはりノルマに起因する行き過ぎた摘発であったと考えられる。

おわりに

東北は全国でも最も早く中共の統治下に入り、旧人員を留用する等の方法が功を奏して、早期から経済が回復した地域である。その比較的平穏な接收の方法は評価に値する一方で、旧人員の問題（旧政権から引き継いだ思想、仕事への態度など）と中共の彼らに対する不信感も接收直後から現れていた。そして1949年になると汚職・腐敗問題に対する警戒と批判が噴出した。これに対し人民法院は、経済犯を、運動ではなく法規によって処罰する方針を示していた。ところが、1950年6月、朝鮮戦争が勃発すると、対外戦争の対応に追われた中共は、一時的に汚職変質・腐敗問題から目をそらすことを余儀なくされた。戦争を支援するために、全力で生産を維持し拡大することが、東北地区での最も重要な任務となった。汚職・腐敗に対する対処はおよそ1年間停止したのである。

1951年5月以降、朝鮮戦争が膠着状態に入るとともに、中共は持久戦を支援し、国内社会を引き締めるという目的の下で、東北において、党内部と政府機関内における汚職と官僚主義に反対する二反運動を開始した。この二反運動とはほぼ同時期に生産動員を目的とする増産節約運動も、東北で率先して展開された。その背景には、抗米援朝運動における東北の後方支援的役割、及び朝鮮戦争の長期化にともなう財政と物資の欠乏があったと考えられる。この状況の下で、10月に毛沢東と中共中央は増産と儉約を実施し、義勇軍を支援することを呼び掛けた。こうした動向に応じて、東北では二反運動（限定された政治動員）と増産節約運動（生産動員）とを統合する形で、広範な大衆運動、すなわち「三反」運動が開始されることとなったのである。この過程で発覚した汚職の深刻さと、運動の展開におい

て中共の予想外の困難が出現するという現実の中で、東北の「三反」運動は、毛沢東の催促も相俟って「打虎」の段階へと強引に押し進められた。この過程のなかで運動は暴力や冤罪を生んでいった。混乱の中で党の末端組織が機能を失い、運動が無秩序化し、暴走する傾向も見られたのである。

この過程を経る中で「三反」運動は、それ以前の生産競争⁽⁹⁰⁾や増産節約といった生産動員と異なって、党のイデオロギーの受容を強要する政治動員となっていった。特に注意すべきは、男女関係を含む個人の生活態度も、私人間の金銭の貸し借りも、罪として数えられたため、民衆の私生活にまで、党の権力が及びつつあったことである。さらに、抑圧的な政治環境に直面して、被告とされた官僚や民衆は、自らに犯罪者のレッテルを貼ったり、冤罪を認めたりすることで、少しでも暴力と恐怖から逃れようとした。その他、日常生活において、あらゆる贅沢と思われるものを隠匿し、わざと質素な服装を身に付けて、節約という上からの価値を受容したように見せる努力も行われた。これは恐怖からくる適応ともいえるが、他方で中共の動員に対して民衆が計算づくで、積極的に振る舞った事例と見なすこともできるだろう。加えて、同一の汚職容疑者に対する処置意見において、当該容疑者が所属していた機関からの意見が比較的寛大であったことも見逃せない。つまり、民衆の生活空間での人間関係が完全に壊されるまでには至っておらず、運動の最中であっても、密接な人間関係の範囲においては互いに庇い合う事例も見られたのである。

以上から、この歴史段階における民衆の中共への服従は、中共の支配に対する一種の適応行動という側面が見え隠れしていた。ゆえに、民衆が中共のイデオロギーを完全に受容したとは言い切れない状況にあったと指摘できよう。さらに、党権力による抑圧的な政治環境の中で、自身が闘争にさらされる恐怖と、党にすり寄ることでそこから逃れたいという希望、さらに闘争を立身の機会とする功利的な欲望などの複雑な感情が、民衆の行動を規定していったと思われる。

なお、「三反」運動から「五反」運動へ移行していく際に発生した運動の行き過ぎが、上記の恐怖や希望・欲望の織り交ざった複雑な感情と、いかなる因果関係を有するののかについては、今後「五反」運動を検討するなかで解明していきたい。

註

- (1) 中国における「三反」運動に関する研究動向は、以下の研究史整理を参照されたい。劉徳軍「『三反』運動研究述評」『党史研究与教学』200-6, 2007年6月, 張俊国「『三反』『五反』運動研究述評」『湖北社会主义学院学报』2, 2008年4月, 等。
- (2) 史料閲覧の便宜や上海の経済的位置づけが原因で、上海の「三反」運動に関する研究が比較的多いと思われる。例えば、楊奎松「新中国「三反」運動的来竜去脈（上、中、下）」『江淮文史』2011-3, 4, 5, 等。
- (3) 東北の遼寧省を対象とする研究は4件ある。高赫男「東北地区「三反」運動述評——以遼寧地区為例」『学理論』2017年9月, 等。
- (4) 泉谷陽子『中国建国初期の政治と経済』御茶の水書房, 2007年。
- (5) 金野純『中国社会と大衆動員』御茶の水書房, 2008年。
- (6) 『内部参考』の読者は中共内部の中高級幹部に限定されており、基層社会の実情とそれに対する中共の関心が反映される資料である。『内部参考』については、台湾の黄正楷「1950年代中共新華社『内部参考』的功能与転変」(国立政治大学東亞研究所修士論文, 2006年)を参照されたい。
- (7) 『東北日報』は東北における中共の機関紙である。紙面は東北の地域性を強く反映しており、東北における中共の政治政策の展開を一貫して考察するには重要な史料である。『東北日報』に関する研究は、梅村卓『中国共産党のメディアとプロパガンダ』(御茶の水書房, 2015年)を参照されたい。
- (8) 個人檔案は「人事檔案」とも言い、中国における民衆を管理する主要な手段である。
- (9) 本稿では、プライバシーに配慮して、史料の引用に際しては匿名化している。
- (10) 心性とは「人々のこころの、自覚されない隠れた領域から、感覚、感

情、欲求、さらには価値観、世界像に至るまでの、さまざまなレベルを包み込む広い概念である」（二宮宏之『二宮宏之著作集2』岩波書店、2011年、102頁）。人々は自覚的に、あるいは無自覚のうちに、自らの心性に基づき行動すると考えられる。そして、民衆の「三反」運動に対する対応を分析する際に、「心性」は有効な概念である。

- (11) 1949年2月9日「瀋陽市十個月来的工作報告（節録）」（中共瀋陽市委党史研究室編『城市的接管与社会改造——瀋陽卷』遼寧人民出版社、2000年、128-129頁）。
- (12) 前掲註(11)書、436頁。
- (13) 1948年11月13日「關於瀋陽情况与存在的困難和問題」（前掲註(11)書、439頁）。
- (14) 「中共中央關於实行精兵簡政，增産節約，反对貪污，反对浪費，和反对官僚主義的決定」『建国以来重要文献選編』第2冊，中央文献出版社，2011年，416-417頁。
- (15) 「關於東北解放後的形勢与任務決議」（1948年11月23日），朱建華主編『東北解放区財政經濟史稿』黑龍江人民出版社，1987年，49頁。
- (16) 「遼北省合作社幹部会上批判旧商人思想明確合作社方向」『東北日報』1949年2月16日。
- (17) 「長農等糧庫發生貪污案後遼北省糧食局進行檢查」『東北日報』1949年2月14日。
- (18) 「長春市公安局懲辦貪污蜕化分子教育全体公安幹部」『東北日報』1949年2月28日。
- (19) 「嫩江県工商局幹部学習中揭發出貪污流職事件」『東北日報』1949年2月28日。
- (20) 「損公濟私享樂腐化宝清県長孫英非撤職」『東北日報』1949年3月25日。
- (21) 「増産節約運動」とは、朝鮮戦争を支援し、財政困難を乗り越えるために、生産を増加させ、節約を励行する運動である。この運動は東北から開始された。
- (22) 「東北稅務工作人員情况」『内部參考』1950年5月22日。
- (23) 本稿では、特別に説明しない限り通貨の種類は「東北幣」である。「東北幣」とは1945年11月に東北銀行が発行した「東北解放区地方流通券」で

- あり、1951年4月まで流通していた。東北幣9元5角に対して、人民元1元で回収を行った。
- (24) 「哈爾濱工作中值得注意の幾件事」『内部参考』1950年5月23日。
- (25) 拙著『中国東北における共産党と基層民衆 1945-1951』創土社、2018年、164-166頁。
- (26) 『建国以来毛沢東文稿』第1冊、中央文献出版社、1987年、543頁、当代中国研究所編『中華人民共和国史編年1951年卷』当代中国出版社、2007年、32頁、等。
- (27) 中国社会科学院・中央檔案館編『1949-1952 中華人民共和国經濟檔案資料選編 総合卷』中国城市經濟社会出版社、1990年、871-872頁。
- (28) 当代中国研究所編『中華人民共和国史編年1950年卷』当代中国出版社、2006年、614頁。
- (29) 前掲註(15)書、272頁。
- (30) 前掲註(27)書、210頁。
- (31) 石建国『從開埠設廠到「共和国」長子』中国人民大学出版社、2016年、81頁。
- (32) 前掲註(15)書、273・343頁。
- (33) 加島潤は朝鮮戦争前後、中共による上海での私営企業政策の変化を分析した。朝鮮戦争勃発後、私営企業に対する「扶助」は戦争を支える物資調達の手段へと変わったと論じた。加島潤『社会主義体制下の上海經濟』（東京大学出版会、2018年）50、58-59、74頁。
- (34) 前掲註(15)書、276頁。「加工制」とは戦争と民衆の需要を満足するために、国営企業は原材料を提供し、加工費を負担して、私営企業に加工を委託することである。「注文制」とは政府機関が私営企業に対して商品を注文することである。「代理販売」とは国営百貨店は私営企業の製品を代理販売することである。なお、上海においても、朝鮮戦争以前から私営企業に対する「加工注文」が行われていた。前掲註(33)書、第2章を参照されたい。
- (35) 前掲註(15)書、389頁。
- (36) 「東北銀行企業信貸拡大」『人民日報』1950年7月9日。
- (37) 「東北銀行召開經理會議結合整風檢查工作」『人民日報』1950年8月20

- 日。
- (38) 「三年来東北工業建設獲得偉大成就」『東北日報』1952年9月20日。
- (39) 「抗米援朝開始後財經工作的方針」『陳雲文選 一九四九—一九五六』人民出版社，1984年，112頁。
- (40) 張樹軍・史言主編『中国共産党重大事件実録紅色檔案 上巻』湖南人民出版社，2006年，369頁。
- (41) 「愛国公約」とは、抗米援朝期間中に、民衆が自主的に結んだとりきめである。各種の公約があるが、共通する内容は、民衆や団体が国家と共産党を愛し、志願軍を擁護することを誓うことである。個人と団体の状況に沿って、具体的な目標と行動が規定された。例えば、「反革命分子」の告発、労働者の生産任務、商工業界の納税義務の強調などがある。
- (42) 前掲註(25)書，179-181頁。
- (43) 「職工認為這是美国陰謀不信能和平解決 商人，市民中普遍存在松勁麻痹思想」『内部参考』1951年7月7日。
- (44) 「一切抗米援朝工作都应当繼續加強」『人民日報』1951年7月5日。
- (45) 「各地人民討論朝鮮停戰談判問題決貫徹執行抗米援朝任務」『人民日報』1951年7月10日。
- (46) 「就朝鮮停戰談判發表聲明」『東北日報』1951年7月23日。
- (47) 「瀋陽市各機關展開反貪污腐化鬭爭」『東北日報』1951年7月24日，等。
- (48) 「關於開展反貪污腐化鬭爭的報告」『東北日報』1951年7月24日。
- (49) 同前。
- (50) 「瀋陽市反貪污鬭爭逐步深入」『東北日報』1951年8月12日。
- (51) 同前。
- (52) 同前。
- (53) 「瀋陽反貪污鬭爭收効大」『東北日報』1951年9月7日。
- (54) 「瀋陽市反貪污鬭爭的初步總結」『東北日報』1951年9月7日。
- (55) 「高崗同志作重要報告号召展開反對貪污，腐化，官僚主義的鬭爭」『東北日報』1951年9月1日。
- (56) 「反貪污鬭爭必須形成群衆運動」『東北日報』1951年9月7日。
- (57) 「瀋陽市委市政府繼續展開反貪污腐化鬭爭」『東北日報』1951年9月17日。

- (58) 関連する報道は『東北日報』以外に、「東北区主要工作情况」『内部参考』1951年3月5日などがある。
- (59) 「東北局召開城市工作會議高崗同志親作總結」『東北日報』1951年6月25日。前掲註(4)書(180-181頁)で、この会議内容について、詳しい解説が行われているので、ここでは省略する。
- (60) 「東北局召開幹部大會高崗同志作重要報告」『東北日報』1951年10月30日。
- (61) 「中共中央關於實行精兵簡政，增產節約，反對貪污，反對浪費，和反對官僚主義的決定」前掲註(14)書，415-416頁。
- (62) 「開展增產節約運動是國家当前的中心任務」『東北日報』，1951年11月21日，「三大運動的勝利」『建國以來毛澤東文稿』第2冊，中央文獻出版社，1988年，481-483頁。
- (63) 前掲註(4)書(183-185頁)と楊奎松『中華人民共和國建國史研究』1江西人民出版社，2009年，263-264頁，には「三反」運動の展開の経緯が詳細に整理されている。
- (64) 「中央転發高崗關於三反鬭争の批語」，前掲註(61)書，513頁。
- (65) 前掲註(61)書，423・426頁。
- (66) 「東北節約検査委員会成立」『東北日報』1951年12月31日。
- (67) 「中共中央關於立即限期發動群眾開展「三反」鬭争的指示」，前掲註(27)書，433頁。
- (68) 「反對貪污浪費，反對官僚主義的鬭争必須貫徹到底」『東北日報』1951年12月29日。
- (69) こうした記事が多くみられる。例えば『東北日報』には、1951年12月29日「旅大反貪污浪費，反官僚主義運動未展開」，1952年1月13日「東北鐵路系統反貪污反浪費運動很不徹底」，等。また『内部参考』にも「東北区有領導幹部在三反運動中積極帶頭決心不大影響運動深入」1951年1月26日，等。
- (70) 「對貪污分子姑息寬容本溪反貪污運動停滯不前」『東北日報』1952年1月14日。
- (71) もちろん，毛澤東個人がそれまでに發覺した汚職問題の深刻さに懸念を覺えたという点も重要である。この点については，前掲註(63)書を参照

されたい。

東北における「三反」運動と民衆

隋藝

- (72) 「虎」とは汚職、浪費、官僚主義の行為がある人物を指す。「大虎」とは汚職金額が1億以上の者である。1,000万元以上の者は「中小虎」である。これらの人々を打倒することを「打虎」という。
- (73) 1952年1月31日「關於搜捕大老虎和檢查處理違法資本家給高崗の電報」前掲註(62)書、第3冊、117-119頁。
- (74) 1952年2月4日「關於限期向中央報告打虎予算和県、区、郷開展三反運動的電報」前掲註(62)書、第3冊、140-142頁。
- (75) 1952年2月4日「對華北区二月底以前打虎計劃報告的復電」前掲註(62)書、第3冊、145頁。
- (76) 1952年2月9日「對高崗關於東北打虎計畫報告的復電」前掲註(62)書、第3冊、178頁。
- (77) 同前、177-178頁。
- (78) 前掲註(63)楊奎松書、290-307頁。
- (79) 「撫順市「三反」中曾施用多種酷刑市委還抵抗拒檢査」『内部参考』1953年2月25日。
- (80) 「三反簡訊」『内部参考』1952年3月1日。
- (81) 1952年10月18日「安子文『關於結束「三反」運動和處理遺留問題的報告』」前掲註(14)書、第3冊、341-344頁。
- (82) 「東北區有領導幹部在三反運動中積極帶頭決心不大影響運動深入」『内部参考』1952年1月26日。
- (83) 「東北區反貪汚浪費運動進展狀況」『内部参考』1951年12月19日。
- (84) 「培養「三反」中湧現的積極分子松江直屬黨委開辦業余訓練班」『東北日報』1952年5月17日、「認真貫徹中共和東北局指示大胆地大量地培養提拔新幹部」『東北日報』1952年5月25日。
- (85) 「旅大三反運動發生嚴重偏向」『内部参考』1952年2月1日。
- (86) 「遼寧省瀋陽市紡績局工程隊：曲S個人檔案(一)」華東師範大学当代文献史料センターEn024-1043-001。近年、華東師範大学は民間に散在している檔案史料を収集する作業を行なっている。
- (87) 華東師範大学当代文献史料センターEn024-1043-001、37頁。
- (88) 華東師範大学当代文献史料センターEn024-1043-001、33頁。

一〇七

- (89) 華東師範大学当代文献史料センター En024-1043-001, 42頁。■は判読不能文字。
- (90) 拙稿「中華人民共和国建国前後の共産党の都市大衆工作と基層社会の再編——遼寧省を中心に——」, 『中国研究月報』 69-11, 2015年11月。

【付記】

本論文は, 2019年度笹川科学研究助成による研究成果の一部である。

(筑波大学 非常勤講師)

ern Song seems to have vacillated between distinct policies, which led to its endless diplomatic compromises and expedient military strategies. However, beneath the surface, the Northern Song Dynasty was striving to balance the battle lines between Kaifeng 開封 and Taiyuan. During this “military process,” the correlation among decision makers in the central government, the military correspondence between Kaifeng and Taiyuan, and the frontier military operations materialized, with its resultant influence persisting into the Southern Song Era.

Having explored the “military process” during the fall of the Northern Song, this article concludes that the reason of its demise is far more complicated than the military weakness hypothesis. The influence of the international relations that the Northern Song faced should not be neglected. On the other hand, with the Jin army marching south, reconstruction of the nation’s defense line plays a vital role in the rebuilding of the Southern Song. Thus, research on the fall of the Northern Song can also prompt us to discuss the characteristic of the Southern Song regime.

The “Three-Anti Campaign” and the People of Northeast China

SUI Yi

During the early 1950s, the Communist Party of China launched the “Three-Anti Campaign” (“San-fan” Yundong 「三反」運動) against corruption, waste and bureaucratic red tape. This article is an attempt to trace the development process of the Movement, by focusing on the regional and geopolitical situation in northeastern China; then tries to clarify the actual mentalities and behavioral responses of the general public to the Movement, by taking up the case of how the people of northeast China tried to adapt to it.

It was in 1949 that there first appeared in northeast China activities intended to combat growing corruption within the CPC; but such direct action was prevented from evolving into a full-blown political movement by the necessity to expand production in response to the outbreak of the Korean War. Then in the summer of 1950, as the Korean War entered a stalemate, a movement to increase production through austerity (Zengchan Jieyue Yundong 增

產節約運動) was launched, while political mobilization in the form of a “Two-Anti Campaign” (“Er-fan” Yundong 「二反」運動) also was initiated.

Later, the two fronts were merged into the “Three-Anti Campaign” and then escalated into the Party practice called “tiger-hunting” (*dahu* 打虎), involving coercing members of the general public to come forth and inform on corrupt Party officials, forcing confessions from the accused through various forms of torture, in order to meet quotas set for the number of offenders.

As the general public became more and more embroiled in such an escalating oppressive political environment, a typical response to the call for austerity would involve people hiding anything that might appear expensive, including coats and shoes, and donning the plainest apparel they could find, to give the appearance of compliance. Others pleaded guilty (even if falsely charged), promising to repent, in order to mitigate the full brunt of the fear and violence perpetrated by the Movement. And then there were the opportunists, who tried to curry favor with the authorities by false accusations and acts of violence directed at their rivals.

On the other hand, concerning how officials accused of similar offenses should be dealt with, the opinions of the government agencies employing the accused showed a modicum of leniency. That is to say, the Movement did not become so unruly that it threatened to completely destroy the human bonds supporting local everyday life, for even during the height of the Movement’s vehemence, we can still observe plenty of attempts at mutual protection based on intimate human relationships.